

ハイライトよねやま

2000年8月1日発行

1. 笹川日中友好基金にみる留学生採用計画

笹川日中友好基金（1991年設立、奨学金：月額10万円、奨学生数累計150名）は、現在行われている中国留学生に対する奨学金支給を2000年度採用から中止すると決定しました。これは、文革時代のイメージを払拭して、時代の変化にあった人材育成の奨学事業を推進するため、今後は留学生調査等を行い、留学生のニーズの分析をして方針を立て、あらたな奨学事業を展開する計画とのことです。

以下は、笹川日中友好基金室長・窪田新一氏の講演「変わる留学生・中国」の一部を要約したのですが、中国人留学生の動向がうかがえます。

中国の社会、経済の変化に伴って日本に留学する学生の量と質に著しい変化が見られる。文化大革命後は、立志伝型、愛国心型、テクノクラート志向などの留学目的がはっきりした国費留学生が多くを占めていたが、市場経済政策が進むにつれて、研究勉学目的のはっきりしない自費留学生が大半を占めてきた。裕福な大都市住民、高所得家庭、一人っ子、親からの送金が増え、来日して、2DKのアパートに住む留学生が50%を占めている。

これら留学生の第一志望は米国、ヨーロッパ、東欧諸国で、日本は“行きたくない国”となっている。そして、日本に留学を希望する若者の中には、中国経済発展神話の中で、日本経済は、中国経済の中に組み込まれていると理解している者も少なくない。そのことは大学での専攻科目の選択に現れている。すなわち、経済/経営/商学は前年同様一位を占めているが、第二位については、理工/電気/機械にかわり、国際関係、地域開発という新しい分野が伸びている。

2. 来日！第一期SY-A奨学生

ポスト2000年の留学生政策（1999年3月文部省発表）で謳われている中に「世界に開かれた留学制度の構築 渡日前入学の普及」があります。米山奨学会では、2000学年度から渡日前入学の推進の第一歩として、現地採用型奨学金制度・SY-A奨学金制度を施行いたしました。従来、米山奨学金は日本に在留する正規の学生を対象としておりましたが、当制度は日本以外の国に居住する上級研究者が現地で応募し、現地で選考試験を受けるといった新しいシステムです。現行は、募集対象を韓国・台湾とし、各学友会（元米山奨学生の交流・友好を深める組織）にその募集と選考を委託しています。2000学年度は、各学友会から3名ずつ、計6名の研究者を招へいすることとなりました。ここに、7月に来日された韓国からの研究者3名を紹介いたします。なお、台湾学友会選考員会によって選ばれた研究者3名は、12月および来年1月に来日されます。

韓国では学友会会長 安春植氏（漢陽大学校 経営学部 教授）が募集実務を担当し、平

澤大学総長趙基興氏を選考委員長とし政府教育部企画管理室長、韓国学術振興財団理事長、韓国 Rotary 奨学文化財団理事長等メンバー 11 名によって選考委員会が組織され、公正かつ厳正な選考が行われました。応募者 15 名のなかから選ばれた精鋭 3 名です。

1. 孔 光 勳 (ゴンガンドン) 氏

中央大学校 (SEOUL 特別市) 化学科の副教授で、グルタチオン S-トランスフェラーゼの構造・機能相関についての研究のため、かつて留学していた東京大学で 1 年間研究することになりました。お世話クラブは第 2580 地区東京江東ロータリー・クラブ、カウンセラーは内山信博氏です。

2. 李 瓊 球 (リジョング) 氏

東義大学校 (釜山市) 会計学科の助教授で、日韓会計情報システムの比較研究のため、亜細亜大学で 1 年間研究することになりました。李瓊球氏も日本留学経験 (拓殖大学) があります。お世話クラブは第 2580 地区東京板橋ロータリー・クラブ、カウンセラーは松澤市治氏です。

3. 李 元 虎 (リウオンホ) 氏

光云大学 (SEOUL 特別市) 建築工学科の副教授で、日本の地震研究と経験を韓国の建築物に応用し、耐震改修工法を開発するため、東京大学で 8 カ月間研究することになりました。李元虎氏はアメリカのコロンビア大学やミシガン大学での留学経験があります。お世話クラブは第 2750 地区東京中央ロータリー・クラブ、カウンセラーは上原清人氏です。

7 月 21 日に、奨学会事務局において、上記 3 名の SY - A 奨学生とカウンセラー、2580 地区理事木村義民氏および宮崎幸雄事務局長による懇談会が行われ、奨学生募集方法やシステムについての意見交換が行われました。ロータリー・クラブの例会に初めて出席した感想は、会員の皆さんに家族のように親しくしてもらい心丈夫であった、多忙を極めるロータリアンの方々が 1 時間という例会の中で、日頃の奉仕活動の成果やその意義を確認しあうなど有効に時間を活用されているのが印象的、次回の例会が楽しみである・・・などがありました。

3 名の研究がすすみ、国際社会発展のために役立てられますよう私たちも応援したいと思います。また、SY - A 奨学制度を今後の米山奨学事業のひとつの重要な制度として育てていきたいと考えております。

以 上